

義長辞世

玉の緒よ 幾世経るとも繰り返せ 猶おだ巻に掛けて恨みん
さそふとも何か恨みん時来ては 嵐の外に花もこそ散れ

Q63 群雄割拠の戦国時代に於いて、長門・豊東郡地域^{ぶんとう}での戦は頭脳合戦とも言うべき方法で戦っていた。兵の少ない「えげ山城主は」（下大野村）一計を立て数倍の城光寺軍（下保木村）を敗走させたその戦術・作戦は何だったでしょうか。

- ①法螺貝・太鼓作戦 ②松明^{たいまつ}作戦 ③水鳥作戦
④案山子^{かかし}作戦 ⑤水攻め作戦

答え ②松明作戦

解説 菊川町に散在する城跡の中で下保木村に位置する所の城光寺山山頂に鎌倉末期から戦国時代にかけて築かれた城跡（城光寺城）があります。この城山の城主と敵対する小豪族が木屋川対岸、下大野谷井のえげ山（大野城）に城を構え、お互い隙あらばと睨み合っていました。えげ山のすぐ側を流れる木屋川の中州に松明を数百と立て敵を驚かし敗走させ勝利したとの伝承があります。美祢（厚城）にもこの作戦で敗れた話が残っており、当時としては良く使われる戦法だったようです。

◀近 世▶

Q64 豊臣秀吉が文禄の役の際に肥前名護屋から大阪に帰る途中、船が彦島近くにさしかかったとき、大きな暗礁に乗り上げてしまい、秀吉は危うく命を落とすところでした。供奉していた毛利秀元の沈着な行動で秀吉を救出しましたが、この船の船頭は責任を感じ自決したといわれます。乗り上げた暗礁はこの船頭の名を取って名づけられました。なんとという名の暗礁でしょうか。

- ① 团右衛門瀬 ② 与次兵衛瀬 ③ 吉五郎秀範瀬
④ 明石ヶ瀬 ⑤ 与太郎瀬

答え ② ^{よじへえがせ}与次兵衛瀬

解説 豊臣秀吉が文禄の役に際して肥前名護屋に出陣していた折、生母大政所の病篤しの急報が届き、早速帰ることになりました。秀吉を乗せた船が彦島近くにさしかかったとき、大きな暗礁に乗り上げてしまい、秀吉は危うく命を落とすところでしたが、供奉していた毛利秀元の沈着な行動で秀吉を救出しました。この船の船頭は明石与次兵衛といいましたが、事故の責任を感じ自決したといわれています。乗り上げた暗礁はこの船頭の名を取って、与次兵衛瀬と名づけられました。

🎧 Q65 豊臣秀吉が大阪城を築くとき、石垣造営のため九州方面から大きな石を運ぶ途中に、海峡に沈んだ岩だろうと推測された大きな石が赤間神宮水天門の下に築かれています。この岩はなんと呼ばれているでしょうか。

- ① 大阪岩 ② 城岩 ③ 秀吉岩 ④ 太閤石 ⑤ 石垣岩

答え ④ 太閤石

解説 赤間神宮の鳥居をくぐると、水天門の下に大岩の泉水が築かれています。赤間神宮ではこれを「太閤石」と称しています。この岩は、昭和42年、下関商港一帯を浚渫していたとき、海底から発見されたもの。どう見ても、本来から海底にあったとは考えられず、識者の間で、豊臣秀吉が大阪城を築く際、石垣造営のため九州方面から海路運ぶ途中事故のため海中に沈んだ大岩であろうと推測されました。(赤間神宮の解説板では、運搬が遅れ、大阪城が完成し、不要になった岩ともいわれています。)

Q66 豊田町神上寺前面の山中には、下関市指定文化財である引地君(キリシタン名マゼンシャ)のお墓があります。この引地君はある大名の息女ですが、その大名は次のうち誰でしょう。

- ①細川忠興^{ただおき} ②毛利元就 ③大内義隆 ④大友宗麟^{そうりん}
⑤尼子晴久^{あまご はるひさ}

答え ④大友宗麟

解説 引地君は大友宗麟の7女です。秀吉の媒酌で、毛利元就の9男久留米城主秀包公と結婚しました。秀包は慶長5年(1600)の関ヶ原の戦後、毛利に復縁し長州に戻りました。秀包の死後、引地君は嫡子の元鎮と豊北町滝部久森へ居住し、後に阿川に邸を移しました。「引地」に邸を設け余生をすごしたことから、一般には「引地君」と尊称されています。長府藩祖毛利秀元^{もうり ひでもと}に家事を一任していた関係もあって、遺骸は長府藩の保護寺、勅願所でもある豊浦山神上寺近くの墓地に埋葬されました。

Q67 下関市立美術館の2階窓から見える石垣は、戦国時代に大内氏の重臣内藤隆春が築城し、17世紀に入って居城として修築された串崎城^{くしききじょう}(櫛崎城或いは雄山城とも)の石垣を復元したものです。修築したのは誰でしょうか。

- ①毛利輝元 ②毛利秀元 ③毛利秀就 ④毛利元就
⑤吉川広家

答え ②毛利秀元

解説 慶長5年(1600)関ヶ原の戦いにより毛利氏は周防、長門の2カ国に減封されます。長府藩の初代藩主となった秀元は、串崎城を居城と定め、慶長7年(1602)に入城しました。現在関見台公園として石垣が整備されました。

Q68 長府藩祖毛利秀元は、文武に勝れ政治力もある実力者でした。面貌^{めんぼう}才知^{さいち}は秀元の祖父元就^{もとなり}を髣髴^{ほうふつ}させると、小早川隆景^{こはやかわたかかげ}が評したそうです。以下の秀元に関する説明のうち、誤りはどれでしょうか。

- ①穂田元清ほいだもときよの子として天正7年（1579）備中猿懸城で出生。
 ②宮中で元服し、後陽成天皇から「菊」「桐」の御紋章ごようぢいの使用を許されると共に、「寮の馬具」（長府博物館蔵）を下賜された。
 ③豊臣秀吉から偏諱を賜り秀元と名乗った。
 ④下関海峡で遭難した豊臣秀吉を救出した。
 ⑤清末藩の誕生をその目で見て、生涯を終えた。

答え ⑤

解説 秀元の願いであった二男元知もとともへの藩領分知きよすえ（清末藩・一万石）は秀元の死後、承応2年（1653）第三代長府藩主綱元が、秀元の遺志じょうおうを尊重して実現させました。慶安3年（1650）の秀元の死から3年後のことになります。分家（長府藩）の分家（清末藩）が出来るのは稀なことでした。長府城下町の基礎を築いた秀元の墓は、功山寺こうざんじにあります。功山寺は、もとは長福寺と称していましたが、秀元の法号智門寺殿功山玄誉大居士にちなんで改称したものです。

Q69 関ヶ原の戦いの後、周防・長門の2カ国に封じられた毛利家は、長府と岩国の地を分封しましたが、長府毛利藩の当初の石高はいくらでしたでしょうか。

- ①約1万5千石 ②約2万石 ③約3万6千石
 ④約5万石 ⑤約6万5千石

答え ③3万6千石

解説 周防・長門の2ヶ国に減封された毛利家は、毛利秀元に長府を中心に3万6千石を分封しました。これは後、5万石となっています。また、吉川広家には岩国を中心に3万石を分封しています。

Q70 承応2年（1653）、長府藩祖毛利秀元もとともの二男元知じょうおうが長府藩から1万石の分封を受けて清末藩が誕生しました。昭和62年（1987）11月、清末藩創設333年記念に、藩邸跡に碑が建立されましたが、そ

の碑文は何というでしょうか。

- ①清末藩邸跡碑 ②清末藩誕生記念碑
③清末藩創設333年碑 ④毛利元知藩邸跡碑 ⑤又松家跡碑

答え ①清末藩邸跡碑

解説 昭和62年（1987）11月、藩創設333年記念に建立された「清末藩邸跡」の碑が、ひとつの藩の存在証明となっています。

Q71 下関市の巖流島（^{ふなしま}船島）は、宮本武蔵と佐々木小次郎（巖流）の決闘で有名です。決闘の勝者、宮本武蔵の碑が北九州市の手向山頂上（^{たむげやま}）にあり、巖流島の決闘の事も記されています。では碑文の内容と異なる説明は、どれでしょうか。

- ①舟島（巖流島）には、武蔵が巖流より遅れて着いた。
②巖流は三尺の白刃を使用した。
③武蔵は木剣の一撃で巖流を殺した。
④武蔵の木剣は、電光よりも速かった。
⑤通称舟島は、巖流島と改められた。

答え ①

解説 碑文（原文は漢文）には、「両雄同時に相会」とあります。（原文「両雄同時相會」）。「二天記」では武蔵が遅刻と書いています。この碑は承応^{じょうおう}3年（1654）、小笠原藩筆頭家老であった武蔵の養子伊織が、武蔵の没後9年目に建立したものです。碑の近くには昭和26年（1951）作家村上元三が建立し小倉市に寄贈した「佐々木小次郎碑」があります。なお手向山には、宮本家墓所があるほか、明治22年（1889）に造られた手向山砲台跡も残っています。

Q72 宮本武蔵と佐々木小次郎が戦った有名な巖流島の決闘は、慶長17年（1612）のことでした。この前日、宮本武蔵は赤間関の阿弥陀寺近く

の船宿に泊まったとされていますが、それはなんという船宿といわれているのでしょうか。

- ①小倉屋 ②大坂屋 ③薩摩屋 ④伊勢屋 ⑤越後屋

答え ④伊勢屋

解説 慶長17年（1612）、剣豪宮本武蔵と佐々木小次郎が巖流島で決闘を行いました。この前日に宮本武蔵が泊まったといわれる船宿・伊勢屋は外浜町とばまちょうにあり、ここから巖流島へ向かって船出をしたといわれています。

● Q73 彦島東部の「弟子待」という地名は、ある人物の弟子がその地で師匠を待ったことからその名がついたという言い伝えがあります。その人物とは誰でしょう。

- ①佐々木小次郎 ②高杉晋作 ③那須与一なすのよいち ④宮本武蔵
⑤吉田松陰

答え ①佐々木小次郎

解説 「弟子待」という地名は、巖流島の決闘の際、小倉から船に乗り込んだ佐々木小次郎を、3隻の船に乗り込んだ小次郎の弟子が追ったところ、小次郎に引き返すよう命じられ、仕方なく近くの岸に船を着けて決闘の結果を待っていたという言い伝えに由来するものと言われています。しかし、「類聚国史るいしゅう こくし」の天長7年（830）の項に記載のある「勅旨田」という地名が「テシマチ」とも読めることから、巖流島の決闘の800年前には既にこの呼び名があり、決闘をきっかけに「弟子待」という字が当てられるようになったという説もあります。

● Q74 毛利長府藩の藩校の名前はなんでしょうか。

- ①日新館 ②明倫館 ③敬業館けいぎょうかん ④集童場しゅうどうじょう ⑤時習館

答え

③敬業館

解説

長府藩の藩校は「敬業館」。長府侍町2丁目の発祥の地には碑が建てられています。この地は一時「集童場」もおかれていた場所です。敬業館は寛政4年（1792）5月に創設、藩士の子弟を教育。集童場は元治元年（1864）に古江小路ふるえ しょうじに設立され、士庶の別なく人材を育成する目的の教育機関。敬業館が移転したあとに集童場が一時移転しておかれました。

Q75 長府の松下村塾といわれた「集童場」しゅうどうじょうに関連する説明で、誤りはどれでしょうか。

- ①集童場は文久2年（1862）に福田扇馬せんまが自宅を開放して設けた私塾おうりゅうてい「櫻柳亭」が母体です。
- ②その後、元治元年（1864）三月、長府藩士熊野九郎が中心となり、古江小路に集童場が設立されました。現在の長府旅館がある場所です。
- ③集童場は、藩の認可を受けた学校です。
- ④集童場場長室は、忌宮神社境内に移築され公開されています。
- ⑤集童場教育の根本は「楠公忠節」（楠木正成の忠義な精神）のことを第一義としていました。

答え

②

解説

集童場は長府藩士熊野直介くまの なおすけ のりゆき（則之）が中心となり設立されました。藩校敬業館けいごうかんが藩士の子弟を対象としたのに対して、集童場は身分の別なく10歳から15歳までの少年を集め、時勢の求める人材を教育することが目的でした。集童場からは乃木希典將軍や、日本のマッチ王・瀧川辨三たきがわ べんぞう、桂弥一かつらやいちほか国家有為の人物が輩出しました。場長室には、熊野則之場長のほか、彼ら子弟たちの写真が掲示されています。熊野則之は、わずか18歳の若さで集童場場長となり、少年の教育に尽力しました。藤田武男著「長府藩花神群」には、「・・・幕末の可憐な少年に取り囲まれた、うら若い先生が机を叩いて楠公なんこうを語り、涙

を流して桜井の駅父子訣別の七生報国の精神を説いている尊い姿が彷彿として目の前に浮ぶ。」と書かれています。吉田松陰先生と同じです。熊野則之は明治元年（1868）戊辰の役に報国隊軍監として出陣し、越後長岡城近くの今町で戦死します。享年22歳の若さでした。場長室の近くに「熊野則之君記念之碑」があります。これは明治20年（1887）、亡き熊野場長の旧恩を感謝し、その忠魂を慰め顕彰しようと、門下生達が建立しました。題字は、共に越後で戦った山縣有朋やまがた ありともが書いています。なお集童場は、慶応2年（1866）、藩校敬業館に併合されました。

Q76 菊川町岡枝小学校構内に顕彰碑が在り、上岡枝小出で文化2年（1805）に生まれた明治維新の先覚者として清末藩校の育英館や長府の敬業館けいぎょうかん、萩の明倫館などで講じ、吉田松陰や諸藩の志士などとも交友があり、道半ば文久2年（1862）赤郷村絵堂で急死した先達は誰でしょうか。

- ①船越清蔵せいでう ②稲原寅惣いなはらとらそう ③岡部官太郎
④雑賀敬二郎 ⑤岩間新左衛門

答え ①船越清蔵

解説 ①から⑤まで全て菊川のためにつくされた先達です。①は清末藩士の家に生まれ、天保9年（1838）には蝦夷地えそ（北海道）を探索してその開発を訴え尊王思想家としても活躍しました。天皇への御進講や、朝廷から長州藩への密勅の仲介をするなど先駆者として積極的な活動を続けましたが、文久2年（1862）8月8日、58歳で急死しました。②は久野の人で庄屋、村長を務め耕地整理等に尽力しました。③は40年近く岡枝小学校の校長でした。④は豊東小学校校長や県会議長など務めました。⑤は七見を収めていた役人ですが過酷な年貢取立て等の改善を図りました。

Q77 宝永7年（1710年）7月11日、豊田町浮石うきいしの農民たちが凶作に対

する年貢の減租を訴え、幕府の巡見使に直訴しました。このとき、直訴した場所はどこでしょうか。

- ①豊田渡瀬 ②殿敷渡瀬 ③浮石十文字原 ④西市一里塚
⑤内日亀ヶ原

答え ⑤内日亀ヶ原

解説 この頃は、凶作と豊作が交互に起っていました。当時の浮石村は、長府藩家老の給領地で、度重なる凶作にもかかわらず納米（年貢）の増量を押し付けられていました。そこでついに農民たちが怒り、代表で庄屋、畔頭はんがしらたち5名が7月10日、下柵路子しもむくろうじの豊田渡瀬で巡見使一行を待ち受けていましたがうまくいかず、翌11日内日村の亀ヶ原で直訴を決行しました。結果的には、ご法度破りということで彼らは長府松小田まつおだの刑場で処刑されました。しかし、この直訴によって年貢の増量は免除されるなど事件は「義拳ぎきん」として後世に語り継がれ「浮石義民頭彰会きみんけんしょうかい」が組織され、浮石の亀尾山神社境内に「義民碑」、内日亀ヶ原には「浮石義民直訴の地」の石碑が建てられています。

🎧 Q 78 江戸時代の赤間関は、港として非常に繁栄していました。これは西廻り航路の寄港地となり、諸国物産の集散地となっていたからです。北国・東北地方の物産を運んできた大型の船をなんと呼んだでしょうか。

- ①猪牙船 ②屋形船 ③菱垣廻船 ④北前船 ⑤西前船

答え ④北前船

解説 下関の港は、西国の船の出入りが多かったが、河村瑞賢かわむら ずいけんによる西廻航路の開発により、北国・東北方面の物産を積んだ北前船が入港するようになり、急速に繁栄し、国内の主要港として成長しました。近松門左衛門の浄瑠璃「博多小女郎波枕」の一節に「千艘出れば入船も、日に千貫目萬貫目、小判走れば銀が飛ぶ、金色世界もかくやらん」とあるほどで、西の浪華とよばれました。

● Q79 江戸時代に港町として繁栄した下関ですが、港町につきものの遊郭もたくさんありました。なかでも全国的に名をはせ、井原西鶴の「好色一代男」にも書かれている遊郭のあった場所はどこでしょう。

- ①稲荷町 ②裏町 ③豊前田 ④竹崎 ⑤新地

答え ①稲荷町

解説 北前船の寄港により下関が繁栄していくにつれ、遊郭も隆盛となっていました。その代表が稲荷町。井原西鶴の「好色一代男」にも稲荷町のことが描かれています。この稲荷町は昭和39年の戦後復興による区画整理のため、町並みの様子もすっかり変わり、町名も赤間町と改められています。下関の花街としてはこのほかに、稲荷町に隣接する裏町、豊前田、竹崎、今浦、新地遊郭などがありましたが、稲荷町の遊郭が全国に知られていました。

● Q80 江戸時代に、松尾芭蕉のように俳諧行脚の旅に出た女流俳人が下関にいました。京都宇治の黄檗山万福寺の山門前には彼女の句碑がたっています。さてこの女流俳人はだれでしょう。

- ①松田さつ ②加賀千代女 ③田上菊舎 ④長門の於軽
⑤林芙美子

答え ③田上菊舎

解説 江戸期の女流俳人として加賀の千代女と並び称されるのが、一字庵菊舎（田上菊舎）です。田上菊舎は、長府藩士の子として生まれ、16歳のとき田耕村（豊北町）の裕福な農家に嫁ぎましたが、24歳で夫と死別して実家に帰りました。やがて俳諧の道に進み、28歳で出家、尼僧になって俳諧行脚の旅に出て、京都、江戸、九州、奥羽などを巡っています。京都宇治の黄檗山万福寺の山門前に「山門を出れば日本ぞ茶摘うた」の句碑が立っています。

Q81 下関市内には孝女こうじょにまつわる顕彰碑が2か所あります。1か所は豊北町滝部の滝部八幡宮境内にある「孝女登波とほの碑」です。もう1か所は清末鞍馬町にある碑ですが、さて孝女の名前は次の誰でしょうか。

- ①浪 ②定 ③みち ④政 ⑤雅

答え ④政まさ

解説 滝部の孝女登波は、文政4年(1821)父・姉・弟を殺され、犯人を探して12年間旅し、やっと犯人の居場所をつきとめて、仇討をしたというその行為に顕彰碑が建立されました。一方、清末の孝女政は、鞍馬町の角屋助三郎の子として生まれましたが、幼い時に父を失い母娘2人で暮らしていました。若い頃から母に孝養をつくして藩主からおほめの言葉をいただくことたびたびでした。年頃になり夫を迎え、夫婦してよく老母につかえ家業に励みましたが、ある日夫の行跡ぎょうせきが急におかしくなり、政を苦しめました。夫の看病と老母への孝養で政は、心身ともに困苦しましたが、持ち前の明るさと精神力で乗り切り、やがて夫の病気も治りました。この政のことを知った幕末の国学者、近藤芳樹よしきによって世に伝えられるところとなりました。碑の高さ110cm、幅63cm、明治7年(1874)に建立されました。

Q82 下関市豊浦町の宇賀(本郷)地区で医者として活躍する傍ら、40有余年にわたって書き続けた日記が当時を知る重要な資料となっている、古谷道庵ふるたに どうあん。彼が生き、その日記に記された時代とは、次のうちどれでしょうか。

- ①戦国後期から安土桃山初期 ②安土桃山後期から江戸初期
③江戸中期 ④江戸後期(幕末)から明治初期
⑤明治後期から昭和初期

答え ④江戸後期(幕末)から明治初期

解説 文化15年(1836)から明治11年(1878)まで生きた古谷道庵は、

医者として活躍する傍ら、領内の世情や身近で起きた小さな出来事を、40有余年の長きにわたって日記に書き続けました。116冊にも及ぶその日記「日乗」は、幕末から明治初期に起きた出来事が彼の目にどのように映ったのかなど、当時を知る重要な資料として保管されています。

Q83 明治以降現在の菊川町は大きくは18の字あざで構成されていますが慶長5年（1600）の関ヶ原の戦い以降明治までは毛利秀元を藩祖とする長府藩、秀元の二男元知もとともを藩祖とする清末藩のどちらかに属していました。次のうち、その当時長府藩に属していた村はどこでしょうか。

- ①上・下岡枝村 ②榑崎村 ③上・下保木村
④上・下大野村 ⑤七見村

答え ⑤七見村

解説 その他、もみ榑もとともの木村 東・西中山 田部村 上田部等が長府藩でした。ちなみに清末藩に属していた村は貴飯村 上・下岡枝村 榑崎村 上・下大野村 道市 轡井 久野 吉賀の各村でした。

🌐 Q84 伊藤家は、江戸時代の下関で西の佐甲家とともに東の本陣をつとめ、大年寄として町政にも参画した家です。特に、江戸時代後半、伊藤いとう奎之允もくのじょう、奎助（静斎）、九三（助太夫）の三代当主は、歴史の裏方として重要な役割を果たしています。オランダ商館一行のシーボルトや吉田松陰との交友もありました。幕末には薩摩藩と長州藩を結び付けた維新の志士が、伊藤家を妻とともに宿所にしていました。この維新の志士はだれでしょうか。

- ①木戸孝允 ②高杉晋作 ③伊藤博文 ④坂本龍馬
⑤西郷隆盛

答え ④坂本龍馬

解説

薩摩藩と長州藩の同盟を策して奔走する坂本龍馬は、下関を往来するにあたり、伊藤邸を宿としていました。特に、慶応2年（1866）の第2次長州征伐小倉口の戦いにおいては伊藤家に止宿して亀山社中を指揮、高杉晋作を助けて海峡に戦いました。また慶応3年2月には、伊藤家を宿所とし、その居に「自然堂」の額を掲げて商務の拠点とするばかりでなく、同じ月の10日には妻のお龍を伴い、以後伊藤家に預けます。そしてお龍は同年11月15日の龍馬遭難の悲報を伊藤家において聞くこととなります。

Q85 日本研究に力を注ぎ、西洋医学を普及させるなど日本に絶大な影響を与えた医師シーボルト（P.F.von Siebold）は参府途中下関にも滞在していますが、その際関門海峡に何という名をつけたでしょうか。

- ①フィリップ・フランツ海峡
- ②マミヤ・ノ・セト
- ③ファン・デル・カペレン海峡
- ④ツッカーリーニ海峡
- ⑤テミンク海峡

答え

③ファン・デル・カペレン海峡

解説

シーボルトは参府の途中下関にも滞在し、関門海峡の測量や病人の診察をしますが、関門海峡の美しい景観に、日本研究の任務を与えてくれた蘭領東インド総督カペレン（van der Capellen）の名を冠し、この海峡を「ファン・デル・カペレン海峡」と命名しました。

Q86 豊田町^{ちょうしょうじ}長正司に、江戸時代の中後期から明治の初めにかけて、大庄屋を勤めた豪商がいました。その人の名前は何というでしょうか。

- ①中野源蔵
- ②伊藤伊兵衛
- ③中野半左衛門
- ④河崎権右衛門
- ⑤中野半右衛門

答え

③中野半左衛門

解説

中野半左衛門は9歳で中野家の当主となり、祖父の源蔵（^{ちょうしょう}長嘯と

も号した文人)の養育を受け、酒造業のかたわら殖産事業にも志し、卓越した活動力を持った大事業家でした。木屋川通船、佐波川通船などを開通させました。

🌐 Q87 江戸時代だけでも12回日本を訪問した朝鮮通信使。日本訪問の際、本州最初の上陸地が下関でした。一行が下関に上陸した際、宿泊した場所は阿弥陀寺(現赤間神宮)とどこでしょうか。

- ①引接寺^{いんじょうじ} ②本行寺 ③東蓮寺 ④国分寺 ⑤西谷寺^{ゆうこくじ}

答え ①引接寺

解説 下関(赤間関)は朝鮮通信使の本土最初の寄港地でした。通信使は対馬・壱岐(長崎県)、相島(福岡県)に立ち寄り、阿弥陀寺(現・赤間神宮)前の棧橋に接岸し上陸しました。室町時代の通信使は50人程度の人員であったため、宿泊場所は阿弥陀寺(現在の赤間神宮)のみでしたが、江戸時代になると、300~500人規模となったため、阿弥陀寺と引接寺が充てられました。阿弥陀寺には三使及び上官、引接寺には中官と下官が宿泊し、通信使の案内と警固のために随行した対馬藩主は馴染みの本陣伊藤家、対馬藩士は下関の商家数十軒に分宿しました。平成13年(2001)8月、通信使の歴史と功績を後世に伝えようと、下関商工会議所や山口県日韓親善協会連合会などでつくる建立期成会が、赤間神宮前の阿弥陀寺公園内に碑を建立しました。石碑には「朝鮮通信使の歴史的な意義を再認識し、一行上陸の当地に記念の石碑を建立、その歴史を恒久的に顕彰しようとする」との建立の趣旨が刻まれています。

🌐 Q88 朝鮮通信使とは、江戸時代に朝鮮王朝(現在の韓国)から派遣された使節団のことですが、この使節団の代表を務めていた人の役職は何ですか。

- ①国使 ②韓使 ③正使 ④上使 ⑤殿使

答え

③正使

解説

使節団の総責任者のことを正使といい、正使を補佐する副使、毎日のことを記録する従事官とあわせて三使といいます。通信使一行は、この三使以下300～500名で構成されます。

Q 89 嘉永二年（1849）吉田松陰は、藩命により北浦海岸防備のための視察を行ないました。下関方面視察の宿は、どこだったでしょうか。

①白石正一郎宅

②林算九郎宅

③本陣伊藤家

④関屋松兵衛宅

⑤本陣佐甲家

答え

④関屋松兵衛宅

解説

弱冠二十歳の吉田松陰は、藩命により北浦海岸防備のための視察を行ないました。下関方面の宿は、伊崎の水先案内人で船宿を兼ねる関屋松兵衛宅（現地に説明板がある）で、嘉永2年（1849）7月15日から20日まで滞在しました。三面海に面した長州藩は、諸藩に先駆けて外国への危機感に目覚めていました。特に村田清風は早くからその対策を講じ、日本海側の海岸に砲台を築き、大操練を行なうなど、沿岸の守備態勢を整えつつありました。外国船の渡来もあり、ことに阿片戦争（1840～42）の情報が我国の危機感を深めました。このような情勢の中、嘉永2年6・7月、吉田松陰は藩命により視察を行ないました。その詳細な巡視記録は「廻浦紀略」として吉田松陰全集に収められています。その中に、巖流島に渡ったことも記されています。

Q 90 決闘の島として全国的に有名な巖流島には、高名な人も多く訪れています。「巖流の墓がある」という意味の文章を残したのは、誰でしょうか。

①斉藤茂吉

②吉田松陰

③坂本龍馬

④片岡千恵蔵

⑤アントニオ猪木

答え

②吉田松陰

解説

巖流島の正式名は船島ふなしまです。下関市大字彦島字船島648番地。この島で慶長17年（1612）4月13日、宮本武蔵と佐々木小次郎が決闘し、敗死した小次郎の号（剣の流派ともいう）から、巖流島とも呼ばれるようになりました。清国が英国に敗北した阿片戦争など風雲急を告げる幕末、吉田松陰は藩命により日本海沿岸の防備を視察しました。彼はこの巡視の記録を「廻浦紀略かいほきりやく」として書き残しています。それによれば、嘉永2年（1849）7月16日の項に「舟に乗りて巖流島に至る。これ佐々木巖流・宮本武蔵激剣し、巖流討たせたりと云ふ。巖流の墓あり。」という意味のことを記しています。

「巖流討たせたりと云ふ」は意味深長な言葉です。小次郎は小倉城下で道場を開き多くの門下生がいたが、弟子たちの乱暴狼藉が激しくて町の人々が迷惑していたので、小倉藩の家老長岡佐渡が武蔵に依頼して小次郎を討たせたのでないか、という説が伝えられています。

《明治維新》

●Q91 文久3年（1863）5月10日、関門海峡で始まった攘夷戦。アメリカ商船ペンブローク号に向けて砲撃するのですが、その合図の最初の一発は下関のどの砲台から放たれたのでしょうか。

- ①前田 ②杉谷 ③壇之浦 ④八軒屋 ⑤亀山

答え

⑤亀山

解説

長州藩は、文久3年（1863）5月10日の攘夷期限に、決行の場を下関海峡と定め、藩兵を下関に集結させました。最初に姿を現したアメリカ商船ペンブローク号に対し、久坂玄瑞くさかげんずい率いる光明寺党こうみょうじは、総奉行の下知を待たずに、5月11日に入った午前2時に、亀山砲台から合図の一発が放たれ、庚申丸こうしんまる・癸亥丸きがいまるに乗って出撃していた光明寺党は両艦から砲撃をしました。第一次攘夷戦において、攘夷の